神戸っ子　昭和40年1月15日印刷通巻46号　昭和40年1月15日発行　毎月1回15日発行

郷土を愛する人々の雑誌

神戸っ子

1月号

magazine kobekko january 1965 no, 46

Gem
Creation
of
Mikimoto

ミキモトのダイアモンドリング

良質のダイアモンド　その輝きを生かす
格調の高いユニークなデザイン　宝石芸
術と呼ぶにふさわしい　ミキモトの豪華
なダイアモンドリングをぜひお求め下さい

ミキモトパール
御木本真珠店

神戸店－三宮・神戸国際会館　Tel. 22－0062
大阪店－堂島・新 大 ビ ル　Tel. 363－0247

A Happy New Year

絵／中西 勝（二紀会）

あけまして
おめでとう
ございます
田崎真珠
三宮店：新聞会館秀品店内
ニューポート店：ニューポートホテル内

われら
神戸っ子

21

三浦富美枝夫人

撮影／西村　雅司

清澄な山野を馳って楽しむ狩猟は最高のレジャーです、と三浦夫人は云われる。ご主人の三浦晴吉氏は戦前派の本格的なハンターで、三浦夫人はご主人の手ほどきを受けて始められ、いまでは十数年という経歴の持主。

「ポインターを使う狩猟が一番楽しみです。ハンターの醍醐味は豊猟のとき。群鳥に出会ったときなどは胸がときめきますね。しかし最近のハンターはよくルールを無視しますが、エチケットは守らないとこわいですよ」と流石にベテラン・ハンター、批評も忘れない。

あけまして　おめでとう　ございます

神戸ヤナセ株式会社
神戸市葺合区磯上通５丁目１
TEL (23) 5402

われら
神戸っ子

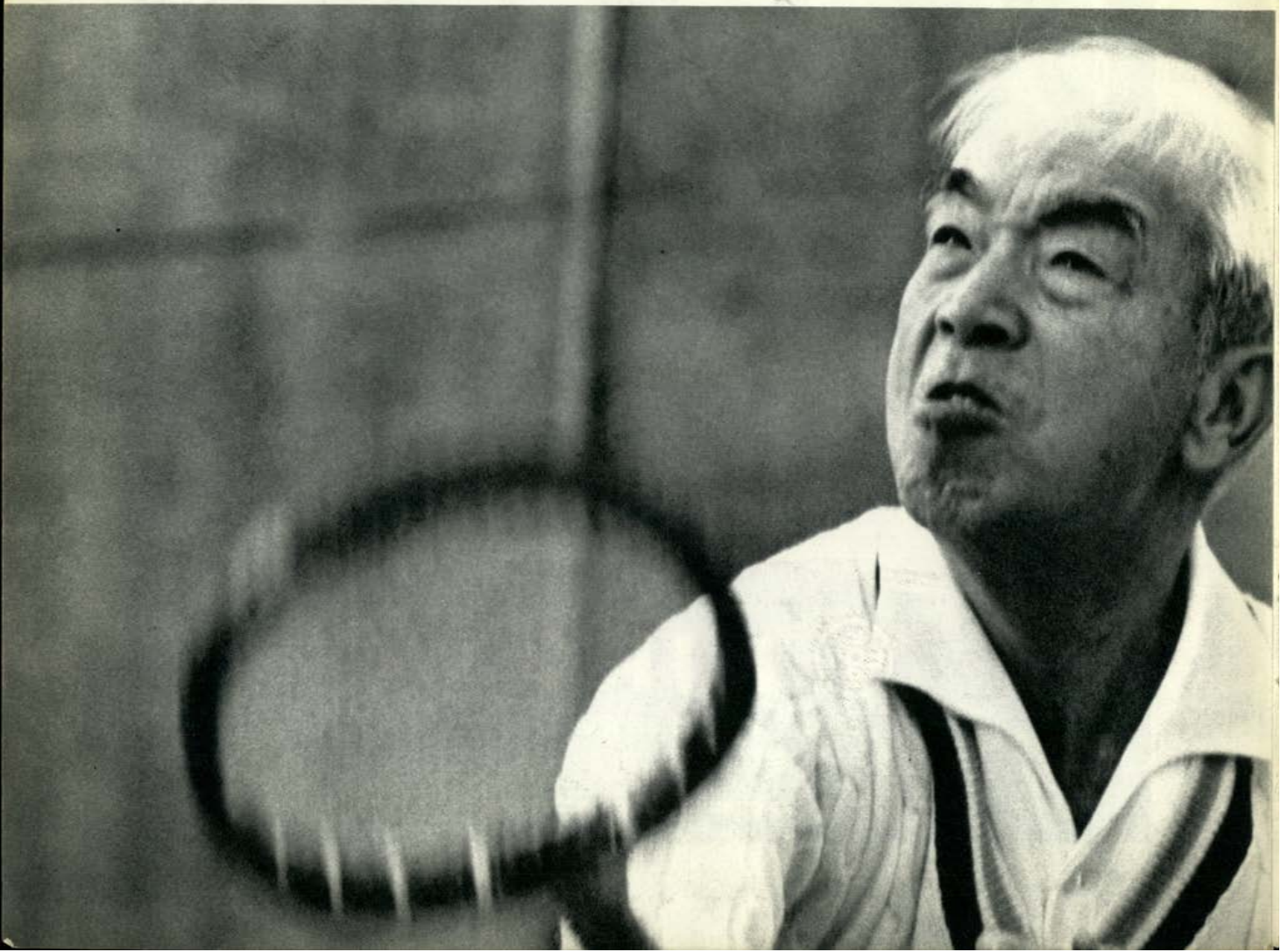
清水善造氏

22

兵庫県庭球協会会長

清水さんは、10才の時にはじめてテニスのラケットを握った。以来、文字どおりテニスの虫となって猛練習を積んだ。わが国テニス界の草分け的存在であるが、大正2年インド・ベンガル州選手権大会優勝、同6年南米アルゼンチン庭球選手権大会に、単複優勝、同10年ロンドン庭球選手権大会優勝と、輝かしい球歴を誇っている。
特に大正9年、米国の大選手チルデンとのデビス・カップをかけた決勝戦での敢闘は、今に語り継がれている。「テニス以外に趣味はない」と言い切る清水さんは、73才の今も、元気にプレーを楽しんでおられる。

撮影／西村　雅司



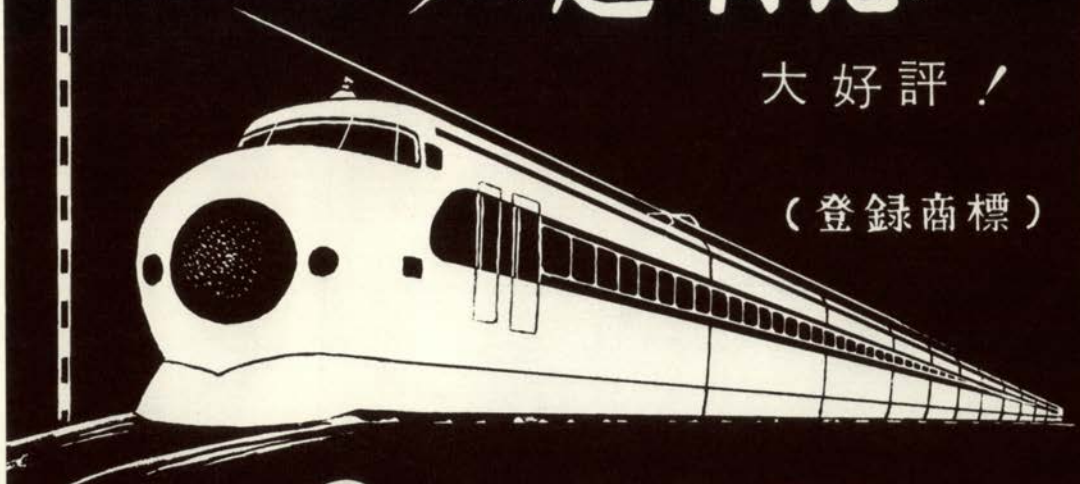
NAGOYA TOKYO

ヒロタの新銘菓

世界に誇る夢の超特急

大好評！

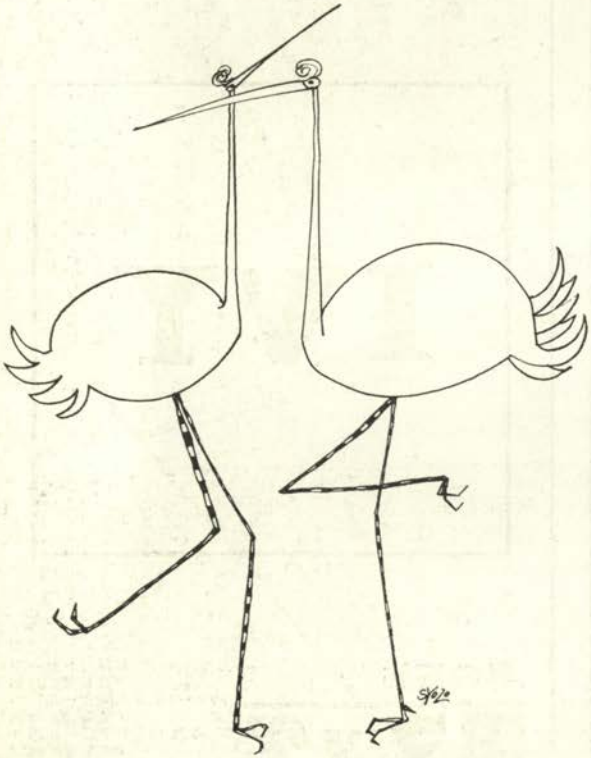
（登録商標）



ヒロタ HIROTA

元町店　元町３丁目 ㉝2340　三宮店　新聞会館秀品店 ㉓2312
㉝3523

KYOTO OSAKA



1月号目次

□ 1 Second Cover ／絵・中西　勝
□ 3 グラビヤ／われら神戸っ子・撮影／西村雅司
㉑三浦富美枝
㉒清水善造
□ 9 わたしの意見／牛尾吉朗
□ 10 随筆／不老長春・出口草露／新春に想う・麻鳥千穂／郷土振興のために・竹田剛男
□ 15 随想／神戸と私の関係・山口誓子
□ 17 随想／「切点」そのころ・林田重五郎
□ 20 連載随想第30回／新春無礼・白川　渥
□ 22 随想／テレビ俳優・足立巻一
□ 25 神戸っ子放談／西山弥太郎
□ 29 経済ポケットジャーナル
□ 30 オリエンタルホテル・ア・ラ・カルト（その7）
□ 33 るほるたーじゅ・コウベ⑥／神戸商船大学・松原新一
□ 38 映画のこと手当り次第⑫／淀川長治
□ 40 こんにちわ船長さん／⑧ルーズベルト号（アメリカ）・玉奥　章
□ 42 神戸の集いから
□ 44 Mode of Kobe・福富芳美
□ 46 1月の髪・西野　明
□ 51 パリ通信⑤／パリのはたち・佐藤昭年
□ 54 暮しのバラエティ・No. 11
□ 59 新春座談会／今の神戸・これからの神戸
皆川理・小松左京・野地脩左・猪野謙二
□ 66 ピンクコーナー（T）
□ 68 神戸で出版されている本
□ 71 神戸を楽しむ私のコース⑥／滝川治子
□ 72 神戸遊戯誌17／硬式テニス②・青木重雄
□ 74 神戸うまいもん巡礼 No. 29・赤尾兜子
□ 76 紳士入門㉓／出世紳士・竹田洋太郎
□ 78 ポケットジャーナル／花時計
□ 80 KobeKKo Shopping Guide
□ 86 連載・第21回／神戸夫人・武田繁太郎
□ 90 愛読者サロン
□ 92 グラビヤ／神戸12ヵ月／六甲山上の迎春・岡部伊都子／カメラ・緒方しげを

表紙／小磯良平・撮影／米田昌弘・米田定蔵・レイアウト／橘　正三

Fachrein's

ドイツ菓子

吟味された材料に
洗練された技術を
加えて“生”の持味
を充分に生かした
お菓子です。

バウムクウヘン
（ピラミッド）
ビスケット
各種ケーキ
各種詰合せ

ユーハイム

本　　店・三宮生田神社西隣
三　宮　店・大丸前　市電筋
神戸そごう・神戸三越・神戸大丸
国際名菓・その他有名百貨店

1965

A HAPPY NEW YEAR

for youngmen

IVY

男の服飾

マック

三宮本店　神戸センター街
TEL ㊴ 0895
トアロード店　センター街西口
TEL ㊴ 0896
新開地店　新開地本通り
TEL ㊺ 7688
姫路店　姫路駅デパート
TEL ㉓ 1261

＊わたしの意見

未来をみつめて

牛尾吉朗
ウシオ工業KK社長
日本青年会議所幹事

浅田長平氏を神戸商工会議所の新会頭に迎えて、神戸の経済界は、新しい飛躍の年を迎えたといえるでしょう従来の神戸財界の欠点は、一つの大きな支柱を欠いていたところにあると思いますが、浅田氏をその支柱としてこれからの大いなる盛り上りを期待したいものです。

これは、たんに財界の問題だけではないでしょうが、何かにつけて《批判》ということが盛んになってきたようです。この傾向自体は結構だと思いますが、ただ批判をするだけに終るのでは、あまり意味がないと言わなくてはなりません。つまり、すべての批判は、それが同時に建設的な助言に裏づけられてこそ、本来の意義が出てくるはずだということです。そういう意味で、経済界において慎しみたいことは、他人のことをとやかくあげつらったり、他人の邪魔をしたりすることなので、たとえ、批判したり忠告したりする場合でも、あとの事をよく考えて援助していくだけの心づもりでなされるべきではありますまいか。そして、究極的には、強い人間関係によって経済界が結ばれていくのが、理想ではないかと思われます。経済界が強く育つための、それが不可欠の条件だといえるでしょう。

神戸財界のやるべき仕事として、例えば町を明るくする運動もいいし、ポート・オーソリティの構想もいいのですが、そういう立案を各種の経済団体が協力して、どのように実現していくか、それが今後の大きな課題ではないでしょうか。私もその会員である神戸青年会議所は、日本一といっていい組織を誇り、団体としての結集力も強く、従来押し進めてきたＯＡＡ活動をはじめ、少しでも社会的に意義のある仕事を今後とも実行していこうという気持は、おそらくすべての会員に共通していると思われます。その意味からも神戸青年会議所の存在意義が再認識されていいのでないでしょうか。

「私の義務は、未来をみつめて、ただ前進するのみ」これは、故ケネディの言葉ですが、私どももこの力強い精神をモットーに、前進してゆきたいものです。

不老長春

出口草露

甘歳（はたち）の時から女学校の教師になった、といえば人は本当にしないかもしれない。

然し「書道」という特殊技能をもっていたおかげで、教員免許状がなくても僕のような者を講師としてやとってくれた女学校があった。今から思えばめくら蛇におじずだが、書道教師が不足していた時代であり、週三四時間の授業の私立学校へは誰も行き手がなかったのである。

上級生は芳紀正に十六、七歳の花ざかり、先生たる僕もニキビはなやかな時代。手本を書いている机の周囲に十数人の生徒がとり巻くと、その青春の、むんむんする香りにポーッとなってしまい、歌をまちがえて書くこともしばしば顔を赤らめ、申しわけの言葉も細い声で、「何いわはったの」と聞かれるしまつ。甘いロマンスも生れぬままに戦争になってしまった。

戦後はこの六七年、さる女子短大に週一回二時間程の講座をもっているが、もはや顔を赤らめることなく、生徒達は吾が娘のごとく可愛いい感じである。

ミス神戸や花のプリンセスになった生徒もおり、爪を染め、唇にうすく紅をさした子もいて教室は華やかだが、みんなよくしゃべり少しにぎやかすぎる。

大体女性はおしゃべりだと思っているからそう苦にならず、必要な二三の注意をしてあとは自主的に書かせているが、やがて静かになり、それぞれ分に応じてまじめに習っている。

講座の初めの時間にやかましく注意した執筆法もなかなか守られず、姿勢の悪い子もおり、掌をとって指示することも多く、吾が子のごとく邪慳に肘を叩いたりするが、ふっと相手に女性を意識するともういけない。掌を触れて変に思われはしないだろうかと、姿勢を正すべきところは遠く離れて教示したり、言葉に変えて言ったりする。

生徒の中には、机間巡視で添削している時、ひょいと僕の顔を見る子がある。

これは、どうも僕には苦が手でその生徒の顔を正視したことがない。

ある先輩に多勢の女性に話す時は、視線を空間に向け、決して、特定の女性に向って話しかけるような姿勢をとるなと教えられたことがあり、また、女性には平等に指導してゆかねばならないとも教えられた。

男性といえども嫉妬心はあるわけだから、僕は、こと指導に関する限り、男女を問わず、忠実に先輩の言を守り、三十年経て来たのだが、若き女性の間に身をおくことは、白髪が大分ふえて来たこのごろ、まことに良いことであると思うようになった。

（書家）

新春に想う

麻鳥千穂

毎年のことながら、年あらたまり、街々の姿が何となくのどかにおっとりした平和な年のお正月を迎えることは、楽しいことの一つです。

神戸で生れ、神戸で育ち、この町に馴れて常々あまり気にもしていないことが、神戸を離れてみると、しみじみとなつかしくなります。幼い頃、東京で3年間を過ごし、戦争たけなわの頃、小学生の時分に、四国の母の郷里、琴平へ疎開して2年半ほど神戸を離れてかしくなります。

去年10月2日に羽田を発ち、ミュンヘン、ロンドン、パリと、旅して10月22日に帰国しましたが、そもそものお仕事は、ドイツのミュンヘンのババリヤフィルム会社が、年末に欧州全般に放送するミュージカル・テレビに出演することでした。緑の木の葉が、次第に紅葉し、ついには枯れて散るまでの間を過ごしたわけですが、異国の秋を充分に味わってきました。日本の秋より一カ月は早い彼の地の秋に、霧雨の降る肌寒い毎日。早朝から深夜まで多忙をきわめた時は、つくづく神戸が恋しくなりました。仕事の終った後のバカンスに、夜のパリのエッフェル塔、凱旋門、サクレクール寺院などが照明にボーッと浮いて見えるのに心を奪われ、ホテルの窓からエッフェル塔を望み、美しい花々に取りかこまれて静かに建っているヴェルサイユ宮殿の庭などを見物しロンドンでは、有名なヴァッキンガム宮殿の閲兵を見たり、ミュージカル「ビックウィック」「オリバー」など観劇して帰国した途端に、郷愁なんか、一度に吹っ飛んでしまって、またの機会を希望する自分になっていました。

次の妹瑠璃子は、一昨年秋に結婚して、神戸に住みつき、もっとも神戸らしい北野町のあたりに居を構え、一望千万弗の夜景を我が家のテラスから満喫して悦に入っています。末の妹千恵子が昨年9月A・F・S生としてアメリカへ留学して帰国しましたが、その間に吸収したいことが山ほどあって半年ほどは夢中で暮したものの、だんだんなれてきてからも、昼間は勉強、集会、パーティなどで日本のことは忘れているけれども、夢の中に、神戸の町、母校、我が家などが、あらわれるといっておりました。

仕事に打ち込んでいる時、楽しい時は、他のことは忘れてしまうわけですが、苦しい時、悲しい時、淋しい時には、いつも慰めてくれる町、切っても切れない故郷というきづなで、私をとらえて離さない町、それが神戸の町です。

新春公演の東京宝塚劇場から、神戸の町を想いながら、1月を過ごすことでしょう。

（宝塚歌劇団花組）

郷土振興のために

竹田剛男

今年度の神戸青年会議所（ＪＣ）理事長の大任を、私がお引き受けすることになった。年頭にあたり、私なりの抱負と所感を書いてみたい。

実をいうと、私は神戸ＪＣ７代目の理事長ということになる。つまり、神戸ＪＣもそれだけの年輪を重ねてきたということだ。会員数からいえば、東京・大阪に次いで３番目に大きなＪＣに成長したといってよかろう。先年のＪＣ世界大会では、ＯＡＡ活動に対して表彰を受けたり、また日本全国大会では、最優秀ＪＣとして顕彰されたりしたことでも判るように、神戸ＪＣの充実ぶりは広く知られている。

そこで、今年の基本的な路線として私達が考えているのは、まずＪＣ創始の精神に立ち戻って、会員相互の人格の涵養につとめつつ、いわばＪＣとしてのチーム力を発揮してゆきたいということである。最近の経済界の情勢をみると、会社経営の苦しさ、商店の収入減少中小企業の倒産など、必ずしも楽観を許さない悪条件が存在していることに気づく。この傾向は、おそらく今年いっぱい続くのではないかとも予想される。こういう時に、ＪＣとしても、もちろん、のんびり構えていることは許されない。ＪＣ本来の《奉仕》《修練》《友情》という基本的精神に重点を置き、社会的責任を自覚するとともに、指導力ある青年経営者

として現在の難局に対処してゆきたいと願うゆえんである。それでは具体的にはどうすればよいか。

ひと口に言えば、内部的にも、外部的にも、仕事を重点的にやり集約化してゆきたいということである。つまり、あれもこれもというふうに手を広げるのでなく、なにかひとつのことに重点をおき、実質的な効果を実らせるということを心がけたいと思うのである。そういう意味で、親睦団体であり同時にまた奉仕団体でもあるＪＣの意義は大きいであろうし、例えば町を明るくする運動などに力を尽くすのも、一つの行き方と考えられる。

ところで、神戸経済界の地盤沈下を嘆く声を最近よく耳にする。そして、それは一応もっともだとも思うのだが、そういう見方が、神戸が貿易の中心になっていた戦前との比較をもとにしている気味合いがないわけではない。その点で、あまり観念的になるのもどうかと思われる。というのは、戦後すでに20年経過して、政治的にも経済的にも、既に中央中心的になりつつある時代であることを思えば、神戸に対する見方も広い視野に立ってなされる必要があるといえるからである。

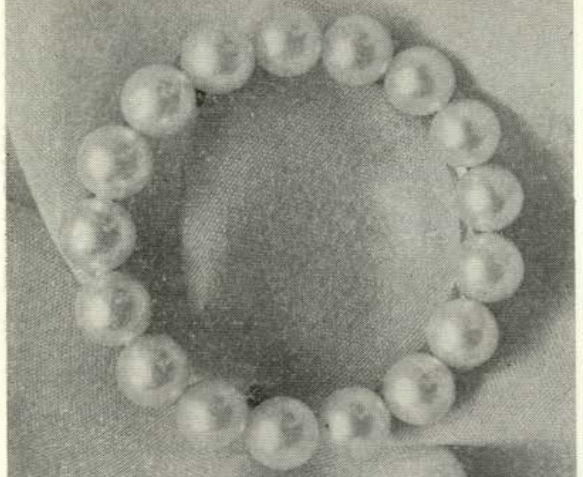
近畿は一つという言葉もあるように、現在は広域経済の時代に移行しつつあるといってよかろう。それだけに、神戸もたんに神戸のみのワクの中に閉じこもるよりは大阪や京都とも相互に協力体制をとって進んでいく方がよさそうに思われる。

ともあれ、神戸ＪＣとしては微力ながらも郷土振興のために、具体的な実りのある仕事を実行したいと思っているわけである。

（関西貿易ＫＫ副社長
神戸青年会議所理事長）

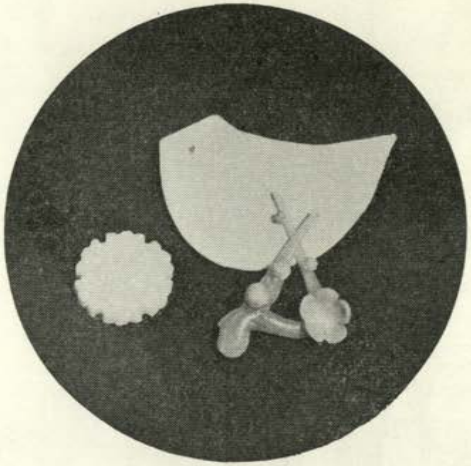
KITAMURA PEARLS

世界の人々に
愛される
キタムラパール



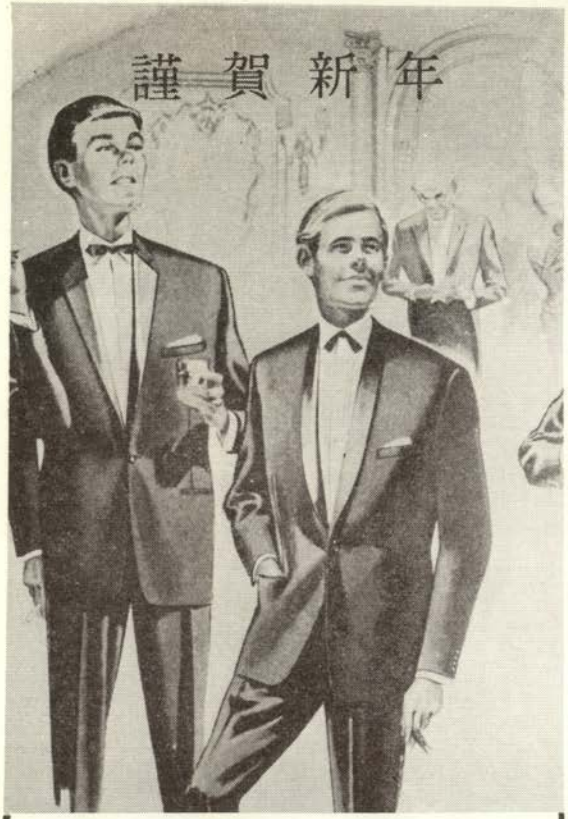
北村真珠株式会社
神戸：元　町　店　TEL ㉝ 0 0 7 2
オリエンタルホテル店 338111 EXT.331
東京：スキヤ橋店　TEL (571) 8 0 3 2

あけまして
おめでとう
ございます
1965



新年御菓子　勅題／鳥

神戸　風月堂
元町3丁目　TEL ㊴ 2412～5



O-SHIBATA

金 柴田音吉洋服店

神戸・元町通４丁目　神戸　34－0693
大阪・高麗橋２丁目　大阪 231－2106

北欧の銘菓

ユーハイム

コンフェクト

本社・工場／神戸熊内町一丁目(市立美術館東隣)　TEL／22－1164・9865
三　宮　店／神戸三宮生田筋(階上喫茶室)　TEL／33－7343・0156・4314
神　　戸／大丸店・阪急店・鉄道弘済会

□随　想□

神戸と私との関係

山口誓子

私の衣・食・住は神戸から恩恵を蒙っている。先づ衣から始めよう。

私は洋服を神戸の上川洋服店でつくる。

私はその主人が気に入っている。電話で洋服の注文をすると、主人みづから車を運転して苦楽園へやって来る。私のところへ来るときは必らず本家ユーハイムの洋菓子を提げて来る。決して他のものをもって来ない。仮縫にも主人みずからやって来る。

洋服の値段を言ったことがない。出来上るまでいくらの洋服なのかわからない。

出来上った洋服を受取って、いくらだと聞くとはじめていくらいくらだと言う。お金を払っても今でなくてもよいと言う。

上川洋服店はいいお得意を沢山持っている。

食に移る。

私は若いときから青黴のゴーゴンゾラ・チーズが好きだ。あの汗臭い、つんと来る強い味が好きなのだ。チーズにして真にチーズ臭いのはこのチーズだ。このチーズの味を覚えると、他のチーズがなまぬるくて仕方がない。

ゴーゴンゾラを、デリカテッセンで売っている私はこのチーズを買いに、道を遠しとせずデリカテッセンへ行く。

この頃流行の味覚の本には、どの本にもデリカテッセンのハム、ソーセージ、スモークサモンを褒めているが、私はそれ等のものには眼も呉れずゴーゴンゾラ・チーズだけをめあてに行って、それが手に入ると満足して帰って来る。あれは夏は輸入しないから、夏の過ぎた頃を見計って買いに行くのである。

竹中郁さんの文章には、トア・ロードを「国鉄の高架線をくぐって百メートル位のぼると右側にデリカテッセンというソーセージ屋がある」と書

いてある。ソーセージ屋！

しかし同じ文章に「この店へ通っているとロックフォールの本物やキャモンベールの本物にめぐりあえる」と書いてあって、さすがにチーズのことにも触れている。ロックフォールは青黴チーズのことだから、ゴーゴンゾラもこれに入るだろう。

キャモンベールを竹中さんにすすめられて食べたこともあるが、私の舌はゴーゴンゾラを至上とし、他をかえりみない。

竹中さんは又、フロインドリーブのパンを私に推賞してやまぬが、中山手通一丁目までわざわざ買いに行けぬから、私は岡本のフロイン堂から配達して貰う食パンを毎日食べている。

フロイン堂はフロインドリーブ系の店だと聞いている。

薪でほんがり焼いたその食パンの、むっちりした味は比類がない。

妻が「暮しの手帖」でこの食パンを紹介したので、フロイン堂から感謝されたが、フロイン堂は生産を制限しているから実は客の増えることを喜ばないのだ。

フロイン堂と言えば、私は田中良雄さんの「私の人生観」で読んだ江州彦根在の豆腐屋のことを思い出す。その本からすこし抽いて見よう。

「彼は毎日たった三箱の豆腐をつくることそれを終生の仕事としていた。来る日も来る日も三箱の豆腐に自分の全心を打ち込んで気に入ったものを作り上げることに無上の楽しみと悦びとを感じていた。さすがに味がよいので、真ぐに売り切れてしまうが、いくらよく売れても、三箱以上は決して作ろうとしなかった」「これ以上手を拡げると自分の意に満たぬ粗末なものを作ることになる」というのである。

フロイン堂の主人はこの豆腐屋にそっくりだ。

私はその食パンが気に入っているように、主人の心掛けが気に入っている。その心掛けがなければ、あのようにおいしい食パンを焼ける筈がない。

私は毎日頭(こうべ)を垂れてその食パンを食べる。最後は住だ。

私の家の洋間の家具は藤井正商店から買う。こないだもベッドが欲しくて中山手通一丁目の店に行った。

私は書見、執筆をしながら、眠くなったら身を横にして直ぐ眠られるようなベッドが欲しかったのだ。

この店の二階に陳列されているシーリーベッドをすすめられてそれを買うことにし、私の注文で身を起しているときにもたれるクッションや枕許の書棚を作って貰った。

書棚の上にスタンドを置き、棚には鉛筆や原稿紙を置く。

店で聞いたが、私の買ったシーリーベッドは常陸宮家の御新婚のベッドと同じものだそうだ。

私はベッドで仕事をしながら、ふっと常陸宮の妃殿下はモナリザに似ておられるなどと思ったりする。

神戸の食パンをゴーゴンゾラ・チーズで食べ、シーリーベッドで仕事をしていると、ついそんなハイカラなことを思うのである。

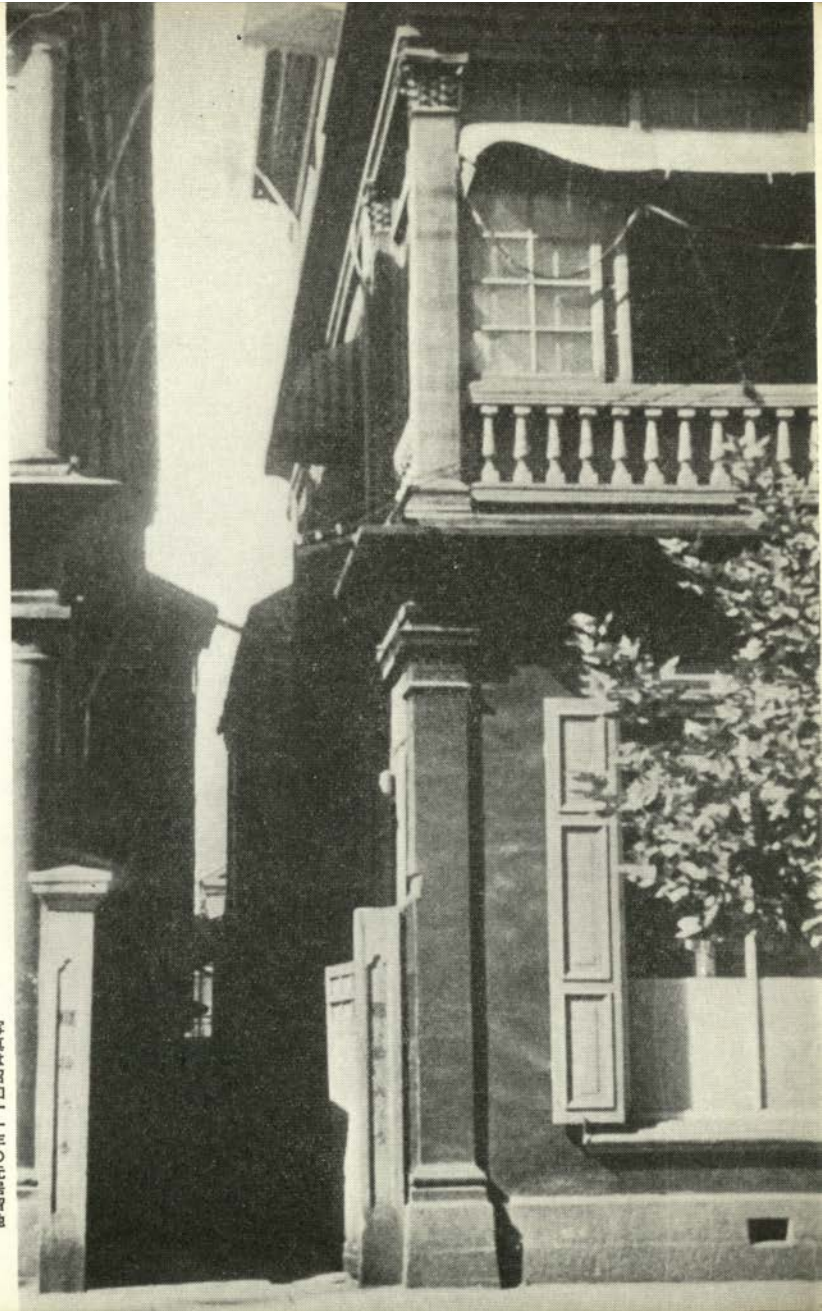
（俳人・「天狼」主宰）

□随　想□

「切　点」そのころ

林田重五郎

そのころは、トア・ロードに住んでいた。国鉄のガードから少し、北へ上ったところ。はじめは西側の露地をはいった木造三階建のアパート風の一室だった。ある朝、台風がおそって、部屋ごとギシギシ揺れた。それで目が覚めて、担当の神戸水上署へとんで行ったら、港内では秩父丸などのロープが切れて、岩壁から離れた巨船たちが、勝手にウロウロ動いていた。昭和九年九月二十一日



写真は昭和十一年の元居留地

の室戸台風である。わが住居は、付近より高い三階建だったためか、屋根のカワラが吹き飛んでハダカになっていた。

そのために、こんどはトア・ロードを隔てた東側の横町をはいった家に間借りをした。主人は表通りの銀細工商の職人だった。

いまもトア・ロードは、元町やセンター街に比べると、夜が暗いが、そのころはいまよりも、もっと暗かったように思う。西側の露地にも、東側の横町にも、夜の花が闇の中にじっとたたずんでいた。引越した当座は帰り道に遊客とまちがわれて、レイン・コートのそでを引っぱられたりした。やがて近所の新しい住人だとわかると、以後は、ていねいに「お帰んなさい。」とあいさつされた。

神戸の警察を担当している記者として、受持ちの警察署の管内に住むのが、仕事の上でも便利である。担当が変わるたびに、引越しをしたが、水上署を受持つことになって、まさか港の船の中に住むわけにもゆかず、といって、元居留地はオフィス街で、間貸しなどのあろうはずがなく、トア・ロードの裏町を選んだわけであるが、一つには島崎藤村の「市井にありて」という本が出たころで、本当の陋巷（ろうこう）を味わって見たかったからでもある。夜の花に、そでを引かれるくらいは覚悟の前であった。

朝五時、目覚ましが鳴る。飯も食わずに、トア・ロードを、まっすぐ南へ走る。メリケン波止場。三分でも時間があれば、五銭のコーヒーと、これも五銭のトーストを飲みこむ。たいていは、その時間もなくて、波止場からランチにとび乗る。朝風を切って和田岬沖へ、そのころになってやっと本当に目が覚める。検疫官がタラップを降りてくるのと入れ替りに、船に乗り移って、和田から突堤へ着くまでの一時間弱の間に、目ぼしい乗客にインタビューするのが仕事であった。いまは羽田空港にとってかわられたが、海外との往来が全部船であったそのころは、神戸の港のこの仕事ははなやかなものであった。週に何度かは、この早朝興行をくりかえす。

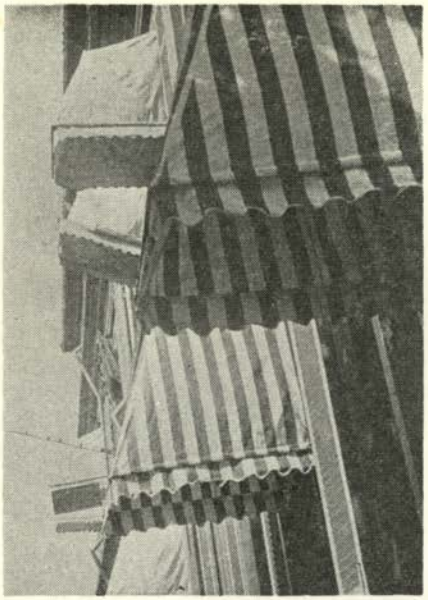
早い船のない朝は、表通りのトア・ロードへ出て朝飯を食う。たしかフロインド・リーブであったと思うが、外人のパン屋が近くにあって、コーヒーもトーストもうまい。なだらかな、この坂道を下ってのんびり水上署へゆく。当時のトア・ロードも、銀細工の店、陶器の店、洋服店、雑貨店、そして経営者も欧州人や中国人が多かったことなど、現在と同じである。

昭和十一年の七月であったが、この通りに街灯が作られた。元町を飾っていた鈴蘭灯のようなハデさのない、尖塔型の六角灯二個を翼にした清楚（せいそ）な感じのもので、〝パリ灯〟などと呼んで町の人は自慢したが、一本おきに「トア・ロード」と「Tor Road」の和洋文字が刻まれた四十八本の街灯は、薄暗かった町に、明るいうるおいを与えた。（この照明灯も、戦災で消えて、もう残っていない）。

そうして、またある日、下の方の元居留地では古い倉庫がこわされて、新しいビルの工事がはじまった。神戸がだんだんかわってゆく感じ……先輩にライカを借りて、何となく元居留地をパチパチと撮してまわったのだが、戦災でこの辺の様子

もかわってしまい、三十年の月日が経って見るとこの写真も珍しいものの一つになった。一本三十六枚のネガのうち、十二枚が先年、朝日新聞の神戸版に連載されて、写真集「ミナト神戸」にも収められたが、この写真は、ネガの残りの部分から抜いたもので、日除け一枚にも、あのころが思い出される。元居留地より上の、ガード付近も撮したような気がするが、ネガが見つからぬのが残念である。

北野町、山本通から、トア・ロードを下って元居留地への線、そのころと同じように、いまも神戸で最も外国的な地帯であるが、あの中に住みついて見て、あの当時感じたことは、単なる異国情緒ではなかった。大げさにいうと世界という円と、日本という円の「切点」である。神戸という港自身が、この意味の「切点」ではあるが、特にこの地帯では、直接「はだ」と日常生活とで、世界に接している。



写真上　昭和十一年の元居留地
写真下　元町一丁目東側の電車道

一般の日本人は外国人について、「×××人だから勘定だかい」といった人種ひとからげの見方をしやすいが、この地帯では「×××人のなかにも、良い人もあれば不良もいる、ピンからキリまである」との体験から知った見方をする。当然のことなのではあるが、このことに気付いてハッとしたことがある。

それが世界人としての本当の感じ方なのではないか、などと思いながら、その後も「切点」の散歩を味わった。いまのトア・ロードは道幅も広くなり、並木も植えられたが、気風は三十年前のそのころとかわらない。

（朝日新聞記者）